



大山寺縁起絵巻（東京大学史料編纂所蔵、鳥取県立博物館「はじまりの物語」図録転載）

お茶の文化は、平安時代初頭（約一二〇〇年前）、唐に渡った僧によって日本にもたらされ、鎌倉時代ごろまでは薬として飲まれていました。鎌倉時代の初めごろに僧の栄西が、石臼で粉末にした抹茶の飲み方を宋から伝えたことにより、大きな画期を迎えます。ちなみに栄西は大山寺僧である基好上人の弟子でもありません。お茶の文化は禅僧によって育まれ、有力な寺院では莊園でお茶を栽培していたことが古文書に書かれています。

鎌倉時代の末ごろにかけて、武士階級へと広がっていく間に茶寄合が盛んに行われるようになり、寄合の場としての会所も発達しました。やがて茶道具の鑑賞と収集という趣向が生まれ、戦国時代には大名などが名品をもつことで社会的な地位を誇示するようにもなっていました。その中でも特に唐物が珍重されました。また、このころから、わびの茶風が流行します。

お茶の文化と寺院とは歴史的に密接につながっています。大山寺も例外ではなかったようで、今回の調査で茶臼、風炉、茶碗という茶道具の一式が出土しました。このことから14〜15世紀ごろの大山寺でもお茶の文化がかなり定着していたことがう



お茶に関する遺物

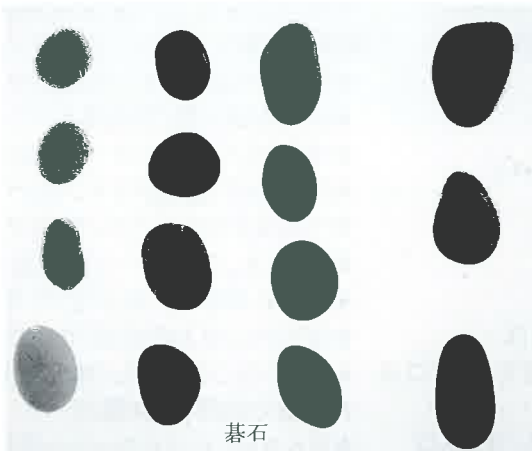
かがえます。

大山町とお茶とのつながりについて『鳥取県地名辞典』に、庄内地区の「茶畑」という地名は、藤原氏の莊園があった、お茶を栽培していたことにちなむという説話があげられています。お茶と寺院とのつながりを考えるととても興味深いと思います。

娯楽について

僧侶たちの娯楽を語るものとして碁石があります。碁石は径1〜2cmの黒色の丸くて平べったいすべすべした自然石で、全部で15個出土しています。

これらの碁石は現在の碁石と比べると少し小さく、形も細長いものや丸いもの、色も灰色から黒色のものまであって、不揃いです。白色の碁石は出土していませんが、これは貝製であったために腐って残らなかったものと推察されます。当時、僧侶も休憩時間には世間話をしながら、囲碁を打って息抜きをしていたのかもしれませんが。



まとめ

出土した遺物から、僧侶たちの等身大の生活や文化などについて知ることができました。

その当時の僧侶たちの様子を、少しは身近に感じていただけたでしょうか？

（社会教育課文化財調査班）